Joykumi Reader
ほのぼの
書き下ろし童話

「神様 ぼくだよ」

井手口 良一・作
Ideguchi Ryoichi

洋輔が3歳になった誕生日の日のことでした。洋輔はおかあさんの前でお空を見上げて

「ぼくだよ」

突然、そんなことを言いました。おかあさんは少しびっくりして聞き返しました。

「ぼくだよって、何かいけないことでもしたの。何をしたの」

「ちがうよ、おかあさん、ぼく、思い出したんだよ」

でも洋輔のその話はそこで終わってしまいました。

「あっ、ぼくのケーキだ。大きい箱だね」

その日のために頼んであった大きなバースデーケーキを持って、おとうさんが帰って来たのです。洋輔はそれはそれはうれしそうに、おとうさんをお迎えに走って行きました。

1年がたって、洋輔の4歳の誕生日が来ました。すると、台所で洋輔の大好きな卵焼きを作っていたおかあさんのそばで、すこし遠くを見上げるようにしながら

「ぼくだよ」

洋輔はまた、あの不思議なことを言い出したのです。

「ぼくだよ」

「ぼくだよって、何かいけないことでもしたの。なにをしたの」

おかあさんは去年と同じように聞きました。

「ちがうよ、おかあさん、ぼく、思い出したんだよ」

でも、今年も洋輔のその話はそこで終わってしまったのです。

「わーいっ、ぼくの卵焼きだ。おかあさん、ありがとう」

洋輔は鼻をクンクンさせながら、それはそれはうれしそうに、手をたたいて喜びました。

またー年が過ぎて、洋輔の5歳の誕生日が来ました。おかあさんは覚えていました。

前の年も、その前の年も、洋輔が誕生日に言ったことを。

洋輔とおかあさんはおうちの近くの公園に来ていました。そして、今年もまた

「ぼくだよ」

洋輔はどこか遠い空を見上げながらそう言ったのです。

おかあさんは今年は何も聞き返しませんでした。やさしく微笑みながら、洋輔の次の言葉を待ったのです。洋輔はやはり遠くの空を見上げながら、

「ぼくだよ。あの時のぼくだよ」

おかあさんはますます、何が何だか分からなくなりましたが、それでもがまんして、何にも聞かずに洋輔を見つめていました。

そこで洋輔ははじめておかあさんの方を向いて、

「あの時、ぼくはおかあさんとおとうさんのお話を聞いていたんだよ。ぼく、思い出したんだよ」

「おかあさんは泣いていたね。お医者さんからぼくが来たこと、教

えてもらったんだね」

「あの時のぼくだよって、おかあさん、今、神様に教えて上げてるんだよ」

おかあさんは本当にびっくりしました。そんなことはとても信じられることではありませんでした。

「あの時って、あの時は洋輔はまだ、おかあさんのおなかの中にいたのよ」

「そうだよ、おかあさん。ぼくはおかあさんのおなかの中に、来たばかりだったんだよ」

「それから、ずっと生まれるまで、おなかの中で、おかあさんとおとうさんのお話を聞いていたんだよ」

「おかあさんがいつもぼくのために歌ってくれた歌、ぼくが生まれてからは、あの歌は歌ってくれなくなったね」

「ぼくがおなかの中でくるくるしてた時に、おかあさんがおなかをなでてくれた。それでぼくはなんだか眠くなって寝てしまったんだよ」

「お母さんが歌ってくれていた歌、こんなんだったよ」

洋輔はとぎれとぎれに、でもはっきりとそうだと分かるように、あの歌を歌いました。そうです。そう言えばお母さんは洋輔が生まれてからは、その歌を一度も歌っていませんでした。おかあさんもその歌を歌っていたことを忘れていたくらいだったのです。

洋輔はおかあさんのおなかの中で一度、体の向きがひっくり返って、そのままでは生まれるときに危ないかもしれないという時がありました。くるくるまわるというのは、その時のことを言っているのかもしれません。

おかあさんは洋輔の歌やくるくる回ったと話した時、洋輔が本当のことを言っていると分かりました。そして思わず、洋輔を抱きしめて言いました。

「そうなのよ。洋輔がわたしのおなかに来てくれた時、どんなにうれしかったことか。もちろん、おとうさんも大喜びだったのよ」

「知っているよ、おかあさん。だってぼくは、みんな聞いていたんだから」

「ぼくはね、たくさんのお友だちと雲の上で遊んでたんだよ。そして、神様にさようならを言いに行ったとき、神様が聞いたんだ。神様って見えないんだけど、声は聞こえるんだよ。どうして、お前はあのふたりを選んだんだってね」

おかあさんはもう、びっくりしませんでした。

「そう、それで、どうしてって答えたの」

「だってね、おかあさんとおとうさんはとっても仲が良かったし、

いつも楽しそうに笑っていたんだよ。なんだか、ぼくもうれしくなったんだよ。あのふたりのこどもになれたらいいなぁって思ったんだよ」

「でも、ぼくがおかあさんのおなかに着いたときに、おかあさんは泣いていたんだもん、ぼくはあわてちゃったよ。まちがったかなってね」

「あら、うれしいから泣いたのよ。洋輔が来てくれて、うれしすぎるくらいうれしかったから泣いたのよ。心配させてごめんね」

「ううん、知ってるよ。それにぼくはまちがってなかったんだよ。だからぼくは今、神様にそう教えているんだよ」

「おかあさんのおなかの中はね、暗いんだよ。でも、とってもあったかくて気持ちがいいんだ」

「生まれるとき、すっごくキチキチのトンネルをくぐらされたんだけど、お外に出たら、とっても明るくって、ぼく、また雲の上にもどっちゃったのかと思って、周りを見回したんだよ」

そうです。洋輔は生まれてすぐ、お医者さんから、おかあさんの胸の上に置かれると、ゆっくりとあたりを見回したんです。

おかあさんは今、とっても倖せでした。洋輔が来てくれたことを、誰に感謝していいのか分らないくらいに倖せでした。もう一度、洋輔をしっかりと抱きしめながら、

「ありがとう、洋輔、おかあさんとおとうさんを選んでくれて、ほんとうにありがとう」

そういいながら、おとうさんが早く帰ってきてほしいと、待遠しくなりました。ただ、なんて言えば信じてくれるかなと、ちょっぴり心配になっていました。

読み聞かせることで親子の絆を深く

Message For You

writer
井手口 良一
◎いでぐちりょういち

1951年5月11日生まれ、1997年大分市議会議員初当選。現在市議会議員5期目。所属会派/おおいた民主クラブ代表。

井手口氏が童話に行き着いたのは20年ほど前、竹田市が台風による大水害に遭い、図書館などの本を失った時。「何とか助けてあげたい」と立ち上がった後輩のOBS女性アナウンサーたちの手助けになるならと「ふるさとのこどもたちへ」という童話を書いたのがきっかけ。

氏の童話は「子どもが読むことよりも、大人たちが読んであげる」という前提で書いてあり、漢字もたくさん使用されているのは父母たちが子どもたちに読み聞かせてほしいとの願いを込めているから。

【井手口良一オフィシャルホームページ】http://www.bocra21.jp/

ご意見・ご感想お待ちしております